

# 心理学 ミュージアム



東京国際大学人間社会学部教授  
高砂美樹

*Profile* — たかすな みき  
1991年、筑波大学心理学研究科修了。学術博士。ミシガン大学研究員、筑波大学助手、山野美容芸術短期大学講師を経て、2001年より現職。専門は心理学史、神経科学史。主な著書は『流れを読む心理学史』（共著、有斐閣）、『心理学史はじめての一步』（単著、アルテ）など。

## G・T. ラッドと日本の心理学



出典は、G・T. ラッド（講述）／浮田和民（通訳）（1900）『教育學ニ應用シタル心理學』文学社

日本の心理学の草創期において活躍した外国人の名前を一人挙げるとするならば、アメリカ人のラッドになると考えられます。ジョージ・トランブル・ラッド (George Trumbull Ladd, 1842-1921) はオハイオ州に生まれ、神学者として教育を積んできました。1881 年からはアメリカでハーヴァード大学と並ぶ名門イエール大学の哲学部の教授になります。当時のイエール大学には道徳哲学の講座はありましたが、心理学はまだなく、やがて心理学の大学院ができるとそちらも担当するようになりました。

心理学の本をいろいろと読むうちに、ラッドはヴェントの『生理学的心理学綱要』(1874年に初版)に出会い、影響を受けます。神学者のなかには、生理学的心理学は人間の魂あるいは精神を脅かすものであるかのように考えていた者もいたようですが、ラッドはむしろヴェントの新しい生理学的心理学の延長線上に、きわめて近代的な「機能的な心」という考え方を打ち出します。自分なりに勉強した成果は、1887年に *Elements of Physiological Psychology* (『生理学的心理学要説』) という著書の形で出版されましたが、この本はヴェント以降の生理学的心理学を解説した英語で書かれた著書として、当時たいへんに重宝されました。今からちょうど100年前の1911年には、コロンビア大学のウッドワースとの共著でこの本をバージョンアップしています。脳の神経といった分野の知見は初版の頃とは比べものにならないほど進んでいましたが、心に関する基本的な考え方は四半世紀経ったころでも十分に意味をもっていたといえるでしょう。

さて、ラッドは日本とも奇妙に縁のある学者でした。ラッドが日本に初めて来たのは1892(明治25)年のことです。この年には帝国大学(現在の東京大学)で講演をしており、その講演を聴いていた人々のなかに松本亦太郎(1865-1943)がいました。松本はのちに日本心理学会の初代の会長になる心理学者ですが、当時は帝国大学の大学院生で、聴覚の研究をしていました。しかし、心理学の実験室もない時代でしたから、実験環境が整っていないことを嘆いて、ラッドにもそのことを訴えました。ラッドはこの若者に「渡米して自分の大学に来たらどうか」と勧め、結果的に松本はイエール大学でPh.D.の学位を取得しました。このときのアメリカでの松本の経験が、のちの1903年、東京帝国大学に日本で最初の心理学実験室ができる基盤となったのです。

ラッドは初来日の翌年の1893年に、アメリカ心理学会の第2代会長に就任しました。1899年に再び来日していますが、この年に奇しくも松本がラッドの元で学位を取得しています。1899年の来日時に講演された内容は、『教育学に應用したる心理学』というタイトルで翌1900年に出版されましたが、このとき巻頭を飾ったものが左頁の肖像です。ラッドは1906年から1907年にかけて3度目の来日を果たしていますが、彼のさまざまな日本に対する功績が認められて、旭日中綬賞(勲三等)および旭日重光章(勲二等)が与えられています。

ラッドは1921年に亡くなりましたが、遺灰の半分は横浜市鶴見区の總持寺に分骨されました。写真の「ラッド博士之碑」は總持寺の境内にあります。アメリカにある製鋼所の機械メーカーの社長になった息子のジョージ・トルマン・ラッドが1934年に日本を訪れたときには、150人もの僧侶によって盛大に儀式が催されたそうです。



總持寺にあるラッド博士之碑